南紀男山焼

1992．3
財団法人 和歌山県文化財センター

例　言

1．本書は広川町により有田郡広川町南金屋に計画された男山カルチャーセンター建設に伴う、南紀男山焼窯跡の発掘調査概報である。

2．発掘調査は広川町の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。

3．調査面積は90㎡で、現場での発掘作業は平成４年１月21日に着手し、２月３日に完了した。

4．発掘調査は文化財センター主査上田秀夫が担当した。また、本書の作成、編集は上田が当ったが、遺物の実測、及びトレースには文化財センター技師村田弘、佐伯和也、黒石哲夫諸氏の多大な助力を得た。

5．本書における遺物実測図と遺物写真の番号は一致せず、写真番号は写○○で示す。なお、遺物番号の直後に○○（写○○）のように写真番号を記したものは、図と写真が同一個体であることを示す。

南紀男山焼　－南紀男山焼窯跡発掘調査概報－

はじめに

発掘調査は広川町による男山カルチャーセンター建設中に大量の遺物が発見されたことを契機とする。遺物が発見された後も工事が続行されたのか、重機の爪跡が生々しく、ここそこに大量の遺物が散乱していた。南紀男山焼は文政10年（1827）から明治11年（1878）までの約50年間の比較的短期間に操業された窯場である。『紀伊国名所図絵』によると、「利兵衛（崎山利兵衛　1797～1875）という者」の発願により、「広八幡の境内に隣て、東西百間、南北五十間の地を陶器場とす。」（図３）とある。当初半官半民という形で運営されるが、御用窯としての性格をかなり強く持っていたようである。また、「磁器の質は、伊満利焼の陶に似たり」と記されているように、製品の主力は染付で、宮崎陶器商人の流通機構に乗って〝伊万里〟のブランドで大量に京阪神や江戸に出荷されたという。窯場の築かれた尾山丘陵はすでに蜜柑畑として開墾され、窯の上部構造はことごとく破壊され、多数の窯体レンガが段々畑の石垣に転用されている。開墾による窯の破壊に伴って出土したと思われるものや、伝世品などが地元を中心に比較的多く残っているが、発掘調査が行われたことはなく、窯場や窯体構造の実態、遺物の詳細はあまり明らかではない。

発掘調査

調査地区は丘陵の南東斜面の下端部の池際で（図２、図版１上）、窯本体ではなく、上部に存在したはずの窯（蜜柑畑の開墾及び今回の工事によって消滅か）の物原の下端一部、もしくは開墾による物原の遺物の２次（あるいは数次）廃棄地点にあたるものと思われる。斜面に大量の遺物を含んだ焼土や砂が互層になって堆積している（図４、図版１下）が、土層図１～７層は近年の開墾による堆積で（７層は昭和30年代の堆積か）、８層以下が窯に伴う物原下端のプライマリイな堆積層の可能性がわずかに残る。従って大部分の遺物は層位性を失い、最上層のものと最下層のものが接合するという状況である。しかし、層位関係を失っているとはいえ、操業時間がわずか50年と短いため、遺物の器種構成や文様構成を抽出することもあながち無駄とは思えない。

図１　遺跡の位置

出土遺物（図５～９、図版２～８）

非常に大量かつ多種にわたる。染付、青磁染付、褐釉染付、青磁、白磁、褐釉磁器、素焼土器（未成品）、陶器、窯道具などがある。量的に最も多いのは窯道具で、全出土遺物の８割近くを占るが、本概報では紙数の制限により、実測図の掲載と概述にとどめる。出土土器の９割以上が染付で、本来、器種や器形と文様の組合せ、あるいは、器種、器形相互の文様のセット関係などを詳しく述べるべきである。しかし、これも紙数の制約により、器種、器形の構成を実測図で示し、文様構成を写真図版で類型化するにとどめ、詳細は別の機会に譲ることにする。ただし、今回出土した染付のうち、復元可能なほとんどの器種、器形、及びその文様構成を図、写真に収録したつもりである。

染付（図５・６．１～68、図版２～６．写１～113）

椀、皿、鉢、蓋、蓋物、香炉、徳利、袋物、急須などがある。染付群として全体的に見れば肥前系の染付との識別は可能であるが、個々で肥前系の中に混入した場合の識別は非常に困難である。また、19世紀的な懐古調の流行とは別に、器形及び文様構成に肥前系の染付の若干古い時期の傾向を写したものなどが見られ、考古学的には非常に危険で厄介な遺物と言わざるをえない。少なくとも県内においては、近世後期の〝伊万里〟の見直しが必要である。文様には中国オリジナルを模倣したもの、肥前系の中国模倣を再模倣したもの、肥前系オリジナルを模倣したもの、男山オリジナルのもの、それらを組み合わせたものなどがあり複雑である。

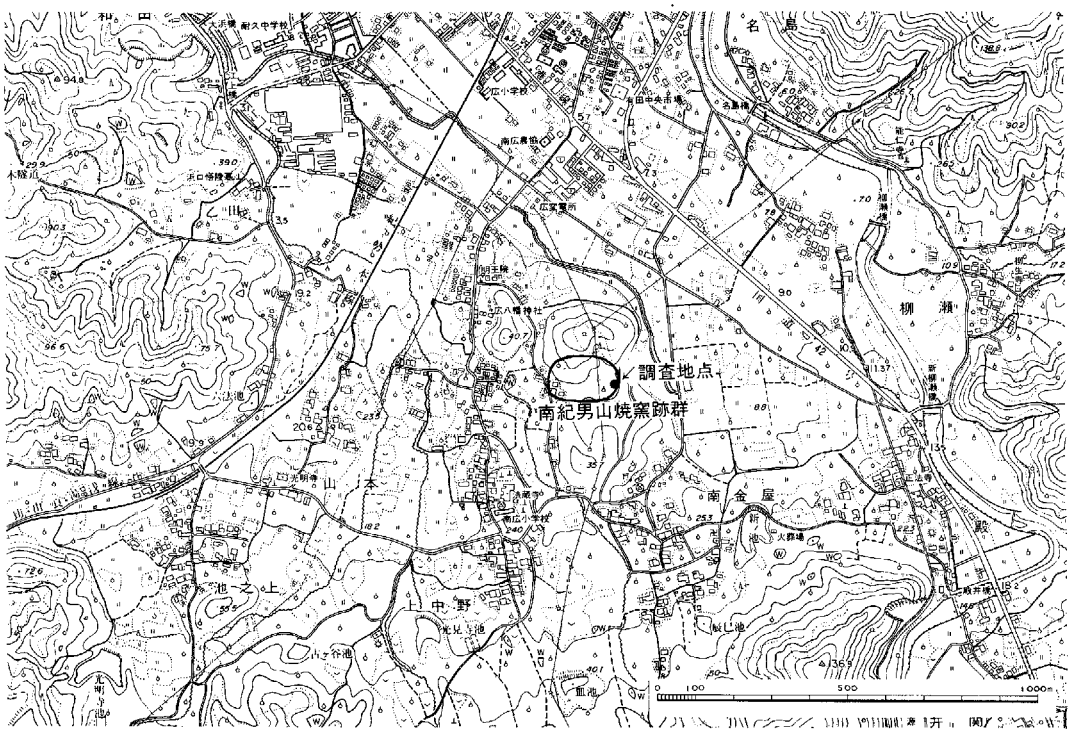


図２　調査区周辺

椀（1～22、写1～48）

1（写1）は関東椀である。時期的に流行を過ぎた器形で、量的には多くなく、文様は清朝写しの一種類に限定される。2～6は腰が張り、口縁はわずかに外反、もしくは直行するものである。大(写2～16)小(写17・18)がセットになり、量的に最も多い。おそらく、主力製品というところだろう。ほとんどの文様に後述する蓋とのセット関係が認められる。最も多いのは肥前系の写しであるが、明末清初の文様を写したものも多種見られる。肥前系を写したものにはほとんど完璧な模倣が見られるが、明末清初のものの模倣には、器形との組合せで一種奇異な感覚を受けるものもある。なお、大小それぞれに6のようなやや厚手で陶胎に近く、胎土、呉須に灰味が強い一群が見られる（写19）。7～10は口縁が外反する器形である。大（写20～26）小（写27・28）あるが、文様上のセット関係はほとんど見られない。明末清初の文様を写したものが多く、作りや絵付けも丁寧である。11・12は口縁の内弯するものである。量的には非常に少ないが、厚手のものと薄手のものが見られる。明末清初の芙蓉手の文様や（写29）ペンシルドローイングの手法（写30）が見られる。13（写31）は腰折で体部が直行する器形である。出土は1例のみであるが、非常に巧みな力強い筆使いで明末の芙蓉手の文様を模倣している。14は体部の内弯する湯飲型のものである（写33）。これも余り多くないが、出土したものはすべて同一文様で、非常に精緻な筆使いが見られる。15は筒型の器形である（写32）。これも出土した文様は一種類で、明後期頃の影響を受けたものと思われる。16～18は平椀で、口縁の内弯するもの（16）、直行するもの（17）、外反するものがある（18）。16の器形の文様構成は体

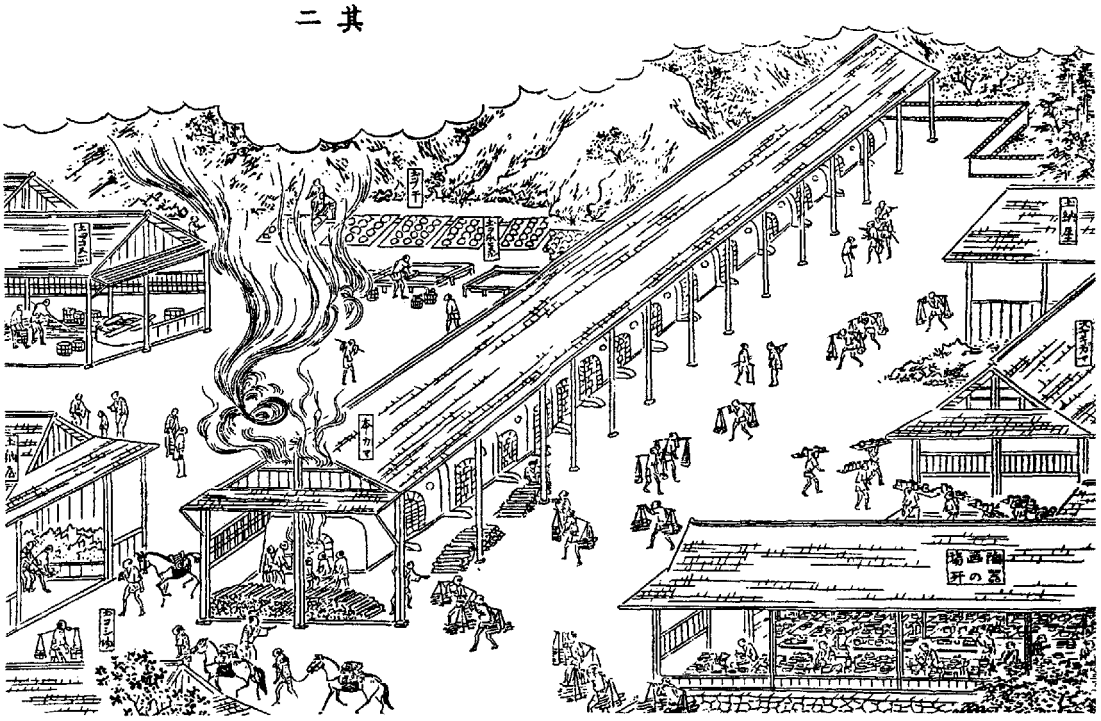


図3 『紀伊国名所図絵』男山陶器場

部下半の文様に統一性が強く、男山オリジナルの文様が多いようである（写34～40）。17（写41）はあるいは蓋になる可能性のあるもので、文様は単一である。18の文様も清朝写しの一種類に限定される（写42・43）。19（写44）・20（写45）は外底に「南紀男山」銘の見られるものである。全体の器形は不明であるが、他に属さない独自の器形と文様を持つものと思われる。21は19世紀の肥前系染付にも流行する「永楽年製」の銘の入ったものである（写46）。体部や高台の器肉が厚い器形である。数点出土するが文様は一種類である。なお、同様の器形で銘を持たないものも出土する（写47）。22（写48）は蛇ノ目高台を持つ椀である。出土は１点のみで、内底に菊花と思われる染付が見られる。畳付の釉は非常に丁寧にフキ取られている。

皿（23～43、写49～70）

23～26は口縁が内弯するものである。大（写49）小（写50）があるが、相互の文様構成上のセット関係は認められない。また、文様のバリエーションは少ない。共に、通常の輪高台と蛇ノ目凹型高台を持つものがある。なお、小型のものは口唇部に鉄による口紅を塗ったものが多い。27～29は口縁の外反するものである。やはり大小あるが、これも文様構成上相互に独立している。大型のもの（写51～53）には内面に明末清初の文様の一部を写したものが見られる。小型のもの（写54・55）の文様のバリエーションも余り多くないが、口縁の内弯する小型の皿と同一文様も見られる。やはり、大部分が口紅を塗っている。大小共に輪高台と蛇ノ目凹型高台が混在する。30は高台が高く、やや深い器形で、口縁が強く外反するものである（写56～58）。文様構成は単純で、明末清初の文様の写し２種類のみが知られる。すべて蛇ノ目凹高台である。31も器形的には口縁の外反する小皿であるが、明末清初の実物の皿を直接モデルにして器形、文様を模倣したと考えられるものである（写59）。幅広の高台から外底を無釉で残すところまで忠実に模倣している。唯一中国製と異なるのは、実物には高台幅にバリエーションが存在するのに対し、この皿の高台幅は出土したすべてが同一規格であるという点である。32・33は玉縁状の口縁と蛇ノ目凹型高台を持つものである（写60）。文様は肥前系などにもよく見られる松竹梅１種類である。なお、口縁の内弯する大型の皿などにも同一の文様が見られる。34・35は口縁の内弯する稜花皿である（写61・62）。文様構成上の規格性は余り認められず、すべて小型で、口唇部は呉須で青く染めている。36～39は折縁皿である。大部分は口縁が稜花である。大小あるが、文様構成上両者の関連は認められない。小型のものは文様が単純で、通例は外面のみに明末の芙蓉手を写すが（写63）、例外的に、非常に精緻な筆で内外両面に芙蓉手の文様を模倣したものもみられる（写64）。おそらく実物をモデルにしたもので、破片では中国製と見間違えるほどである。40～41は大皿である。量的には少ない。40（写67）の内面には松竹梅が見られる。41（写68）の外底には「□□男□」銘が見られる。42（写69）は口縁端部を外に折った浅い器形のもので、類例は少なく、文様構成も単純であるが、口縁の外反する大型の皿（27・28）などの一部と共通する明末清初の文様が見られる。43（写70）は碁笥底の皿と思われるものである。碁笥底の製品は他にも見られるが、皿は１点のみの出土である。

鉢（44～53、写72～88）

大型の鉢が非常に大量に出土している。文様構成上は他の器種とのセット関係がほとんど見られず、大型鉢独自の文様体系があるものと思われる。44は口縁部がわずかに内弯ないし直行する深鉢である（写72・73）。明末の呉須手をモチーフにしたものなども見られる。45は口縁を外反させた深鉢である（写74～78）。内面の文様は種々あるが、外面の文様は呉須手風のものや芙蓉手を写したものが多い。46はやゝ小振りで、器肉の薄い口縁の外反する鉢である（写79・80）。量的に少ないが、文様は唯一椀、皿などとセット関係を持つものである。文様のバリエーションは少ない。47・48は口縁端部を水平に外に引き出した、特徴的な器形の浅鉢である（写81・82）。すべて蛇ノ目凹型高台で、外面の文様は肥前系に多用される唐草のモチーフを用いているものが多い。49（写83）は口縁部を「く」の字型に折り曲げた折縁の稜花鉢である。この種のものの多くは外面の文様は明末芙蓉手などの模倣で、内面は中国製や肥前系、もしくはオリジナルの組合せなどが見られる。恐らく、実物ではなく文様集などを手本にしたと考えられるが、筆使いは非常に達者である。50・51は台形状の口縁を持つ、きわめて19世紀的な器形の浅鉢である。口縁部中実の50（写84）の文様は１種類のみである。51は口縁部を折り返して中空にしたものである。内面に窓を設け、瑞花や花弁花弁を共通のモチーフとし、外面の文様は花鳥を描いたもの（写85）と芙蓉手を写したもの（写86）がある。52（写87）は口縁部を水平に折り曲げ、方形縁にしたもので、１点のみの出土である。芙蓉手を写した外面体部の文様や内外口縁部の花弁唐草のモチーフは49や51などと共通する。口唇部には口紅を塗る。54（写88）は向付風の角鉢である。これも１点のみの出土で、文様は草花を主体とすると思われる。

蓋（54～59、写71・89～101）

54・55は椀蓋である（写89～97）。１の関東椀や口縁がわずかに外反する２～５などとほとんど同じ文様構成を持ち、セット関係が明らかである。56～58は合子や段重などの蓋である（写98～101）。出土例が余り多くなく、身とのセット関係が把握できないが、大型の58（写101）に描かれた蝙蝠は椀や椀蓋と共通のものである。59（写79）は型押しの酒器の蓋である。

その他（60～68、写102～113）

60は筒型の蓋物である（写102）。口縁端部及び、内面口縁部の釉をケズリ取っている。文様は一種類のみで、外面体部上半に簡略化した唐草が見られる。61（写104）は香炉で、内面体部下半を露胎で残す。出土例は少ないが、祥瑞の影響なども見られる（写103）。62（写105）は碁笥底の小杯と思われる。外底に「□□男山」銘が見られる。畳付部の釉をケズリ取っている。63（写106）も碁笥底の製品である。畳付付近から外底、及び内面は露胎で内面には浅く細い摺目が見られる。卸皿であろうか。１点のみの出土である。64（写107）・65（写108）は徳利である。器形、文様、大小様々である（写109・110）。66（写111）は口縁がラッパ状に開く袋物と思われるものである。類例は少ない。67（写112）は急須の注口である。同一タイプの把手の型も出土しているが、出土は１点のみである。68（写113）は蓋の可能性がある小さい型押し

の製品である。上面には染付が施された唐草状の浮文があり、体部には径約２㎜の穿孔が見られる。口縁部の釉を雑にフキ取っている。

青磁染付（図６．69・70、図版６．写114）

すべて筒型の椀である。ほぼ完璧に肥前系のものを模倣するが、内底の五花弁はコンニャク判ではなく筆書きで、内面口縁部によく見られる四方襷は２本の圏線に簡略化されている。

褐釉染付（図６．71～73、図版６．写115～120）

外面に褐釉を施し、内面を染付にするものである。71は平椀である。外面口縁部から高台外面まで赤味の強い褐釉を施したものである。内面の染付文様は３種類見られるが、網目を描いたもの（写115）以外は、花鳥を描いたものや清朝風の文様など（写116～118）、それぞれ１点のみの出土である。なお、内底に花鳥を描いたものの外底には富貴佳器銘の模倣が見られる。72（写119）は口縁の外反する深い器形の鉢である。外面には意識的に施した回転ヘラケズリ状の細い段が見られ、内面には竜や雲堂が描かれている。外面の褐釉は赤味が強い。１点のみの出土である。73（写120）は香合の蓋であろうか。動物様の意匠を型押しした外面に黄味の混った褐釉を施し、内面には鏡餅に取り付く鼠が非常に巧みに描かれる。１点のみの出土である。南紀男山焼の傑作の一つに数えられる伝世品、桃形香合の内面にも同様の染付が見られる。

青磁（図７．74～86）

男山窯の青磁は肥前系とはいささか趣を異とし、中国製の模倣が多いようである。74・75は体部外面に細い丸ノミによる蓮弁文を施したものである。全釉で、外底を蛇ノ目に釉ハギする。明らかに明代の青磁椀の模倣である。失透してくすんだ釉色のものが多い。76は浅い器形の椀で、これも明代のものに時々見られる器形である。釉は薄く、釉色も灰白色に近い。全釉で畳付部の釉をケズリ取っている。77は線描蓮弁文の小椀である。ガラス質で透明度の高い釉がかかる。全釉で畳付部の釉をケズリ取る。78・79は南宋代の杯に似た器形である。全釉で畳付部の釉を丁寧にケズリ取り、露胎部は〝鉄足〟風に赤橙色に発色している。80は小片であるが、輪花鉢になると思われるものである。外面体部は輪花に従ったヘラに依る縦線で区画される。釉はくすんだ暗緑色で光沢がある。81は稜花鉢と思われるものである。外面体部には密に浅い沈線を巡らせている。釉は灰緑色で沈線部の釉には虫喰が目立つ。82は型押しの角鉢である。彫りは深くシャープで、暗緑色の釉は光沢がある。83は型押しで角型の袋物状のもの、もしくは香炉と思われるものである。外面４面の窓には波濤が型押しされる。釉は透明度が高く、青味が強い色調で光沢がある。畳付部から外底、及び内面は露胎である。84・85は香炉である。外面無文のものや、外面体部に丸ノミで浅い圏線を巡らすものなどがある。内面体部下半を露胎で残す。86は稚拙な表現の龍首状の把手が付いた鉢、もしくは片口と思われる。透明度が高く、光沢のある草緑色の釉がかかる。

白磁（図７．87～93）

白磁の出土は青磁より更に少量である。小椀（87）、筒型の椀（88）、小皿（89）、鉢（90）、蓋（92）、緒締玉（93）などが出土している。

褐釉磁器（図７．94）

椀や皿が数点出土している。すべて同一タイプで、褐釉染付同様のやや赤味の強い釉が全面に施され、外面体部に蓮花や唐草の暗花が見られる。暗花はやや太く、鈍重である。

素焼土器（図７．95～101）

大量の素焼状態の未製品が出土している。第３図においても〝本カマ〟と並んで〝スヤキガマ〟の名称が見られる。大部分が染付で、素焼状態のものに化粧土を塗り、呉須で染付をし、更に透明釉を施した、本焼直前のものが多い。95は青磁になるものであろうか。内底に型押しの鳳凰の浮文が貼付けられている。96・97は折縁の稜花皿で、細い隆線を絞り出しによって貼付したものである。おそらく、染分けにより交趾写になると思われるものである。98も同様の袋物である。99は植木鉢である。青磁であろうか。100～101は大型の狛犬や獅子などのたてがみなどの部分と思われるものである。染付で同様のものが広八幡神社に伝世されている。

陶器（図７．102～110）

102～104は焼締陶器である。当初、窯場で使った他の窯の製品かと考えたが、103には焼歪が認められる。おそらく、このような製品も焼成していたのであろう。105は灰釉のかかった嘴状の製品である。台状の部分は露胎で、何かの蓋かも知れない。106～110は椀形と蓋形である。小型の匣と匣蓋の可能性もあるが、椀、蓋共に褐釉を施したものがあり、確としない。

窯道具（図８・９．111～184）

非常に大量に出土するが詳述する紙数を残さない。図示したもので出土した窯道具のほとんどすべてのバリエーションを網羅している。匣（111～115）、匣蓋と思われるもの（116）、トチ（117～124）、チャツ（125～126）、天秤台（127～134）、ハマ（135～180）などがある。なお、匣類以外の上端面にはほとんどすべてに硅砂が付着し、大型のハマ類や天秤台などにおいては明確に刷毛塗りした痕跡を残すものが多い（130～132においては実測図破線内に付着）。この硅砂が調査区に焼土などと互層になって大量に堆積していた砂の正体である。なお、146・181はハマ及び５足付ハマの使用例を示したものである。窯道具を全体的に見て、非常に19世紀的、関西的な組合せと言えるが、意外に匣類が少ない。また、足付ハマの大部分は５足付で３足付（179・180）はごく少量である。182～184は足付ハマの素焼型で、184には「男山」と読める墨書が認められる。

図４　調査区平面図・土層図

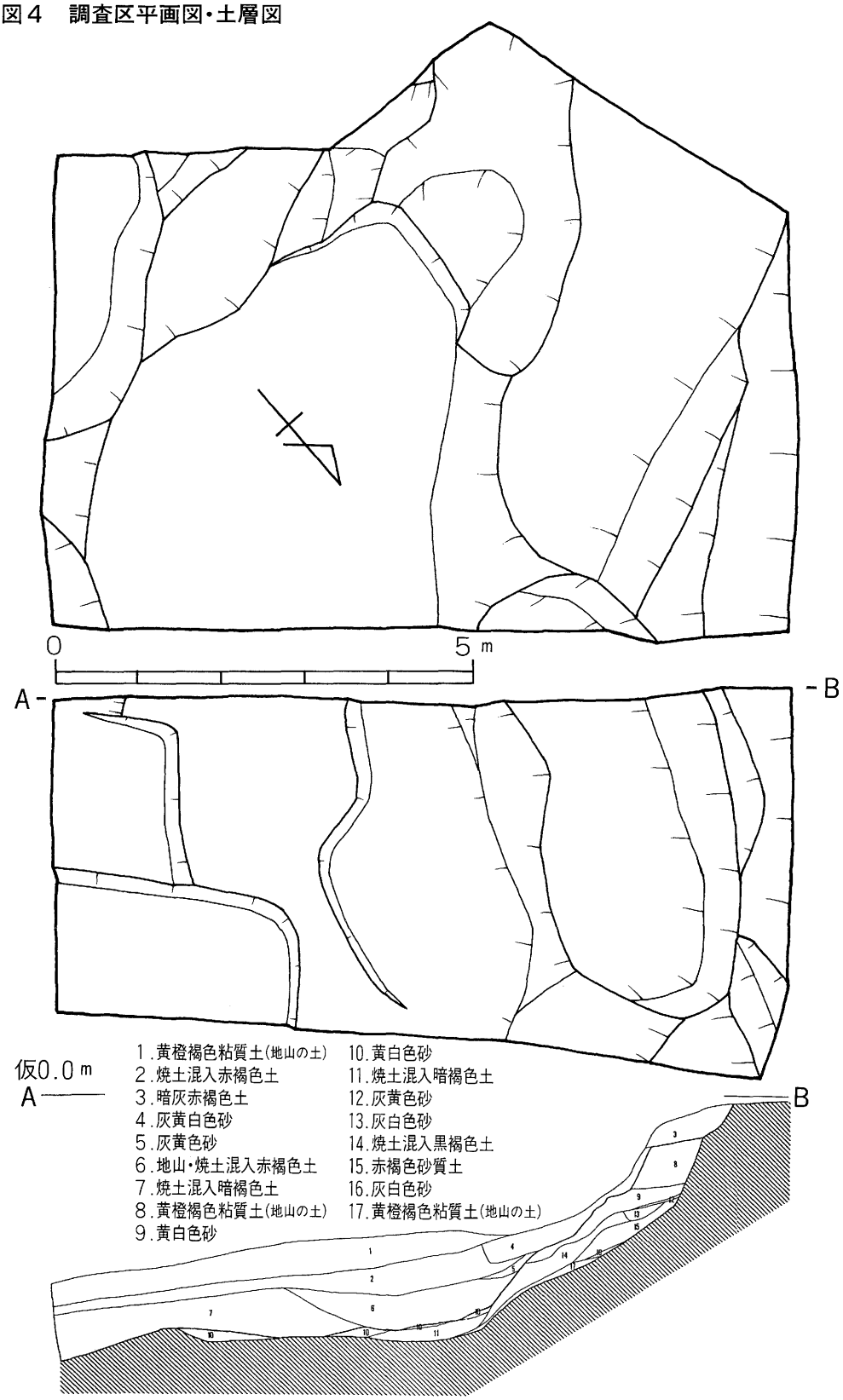


図５ 遺物実測図１

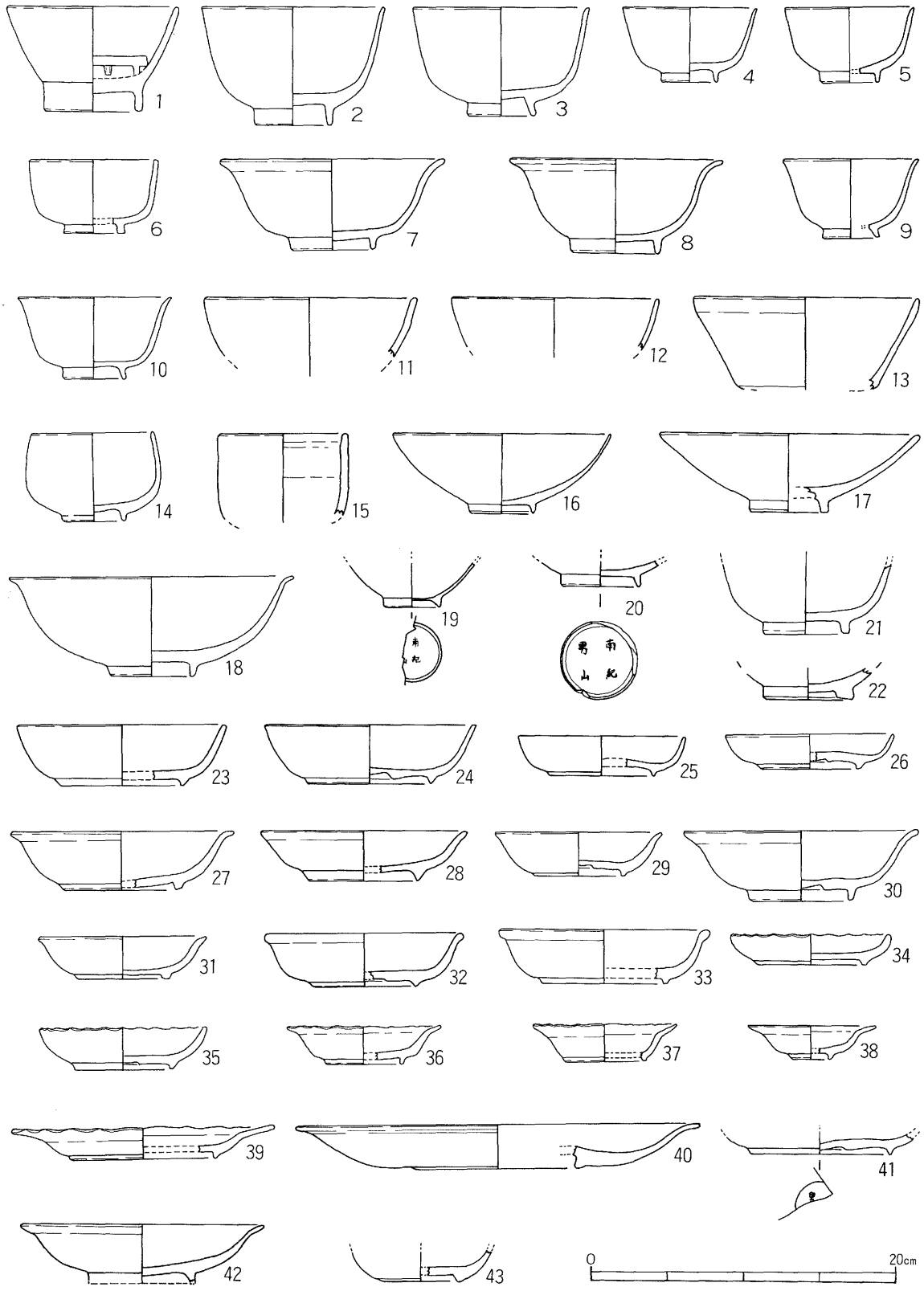

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
0
20cm

図６ 遺物実測図２

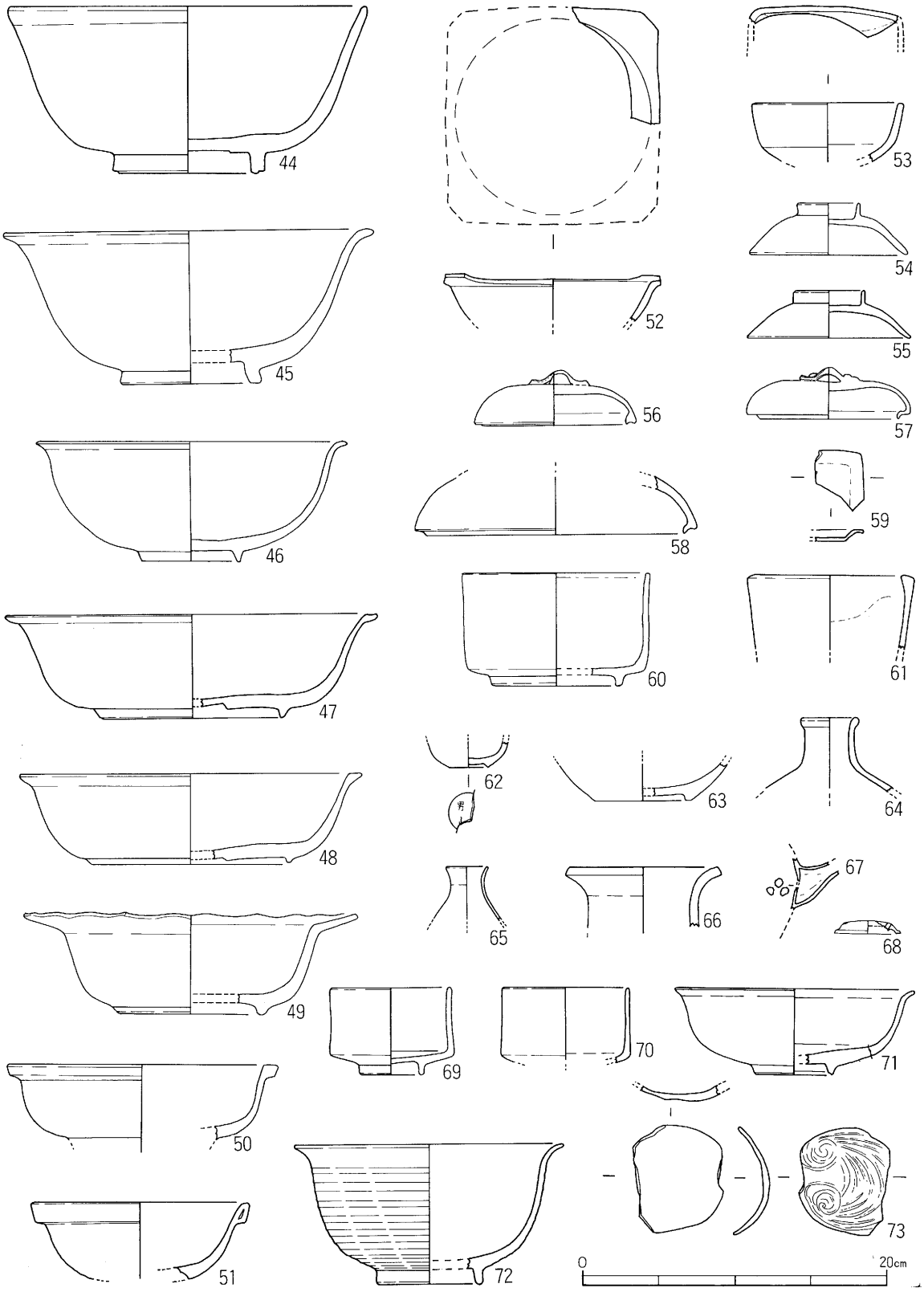

44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
0
20cm

図７ 遺物実測図３

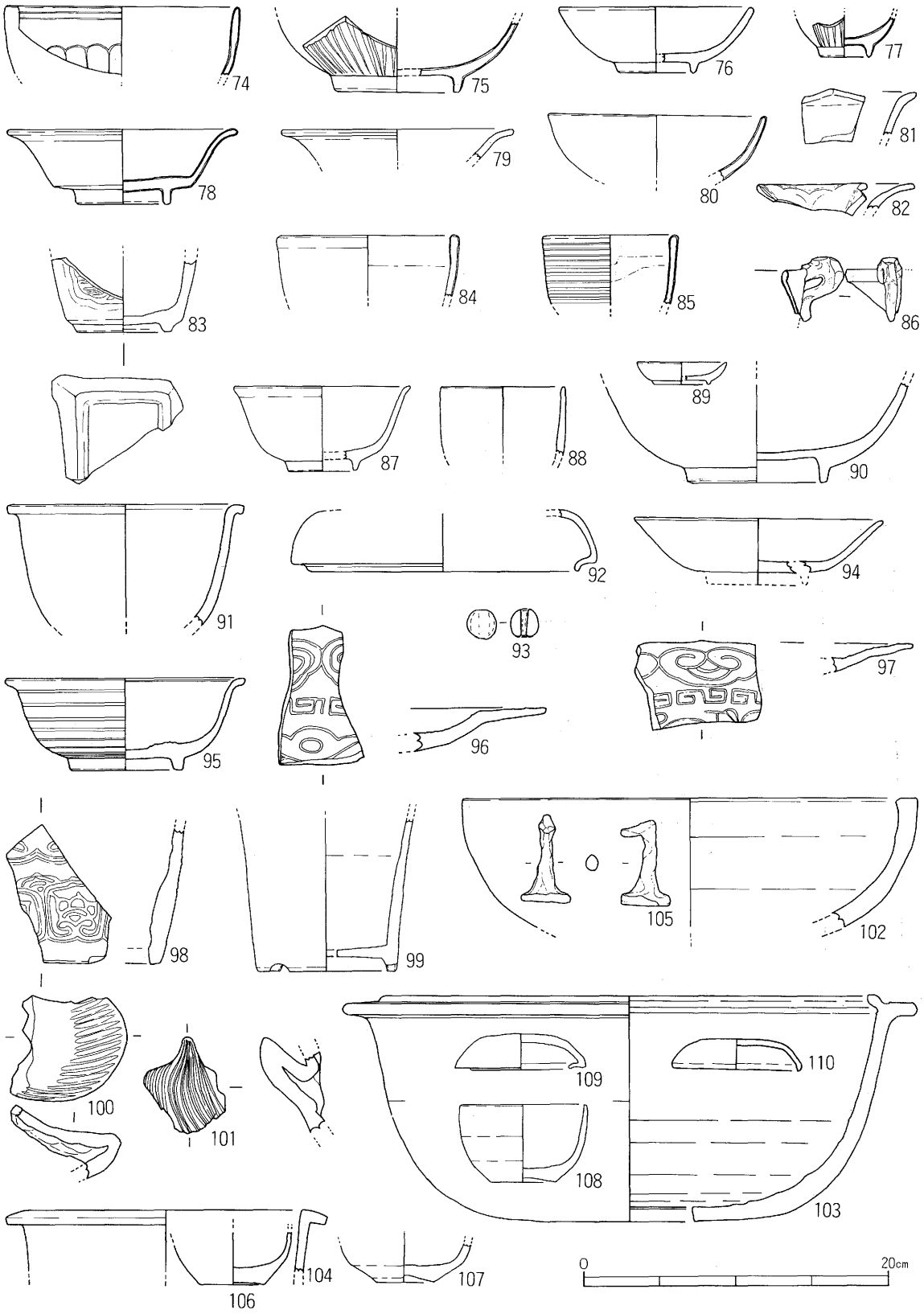

74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
0
20cm

図８ 遺物実測図４

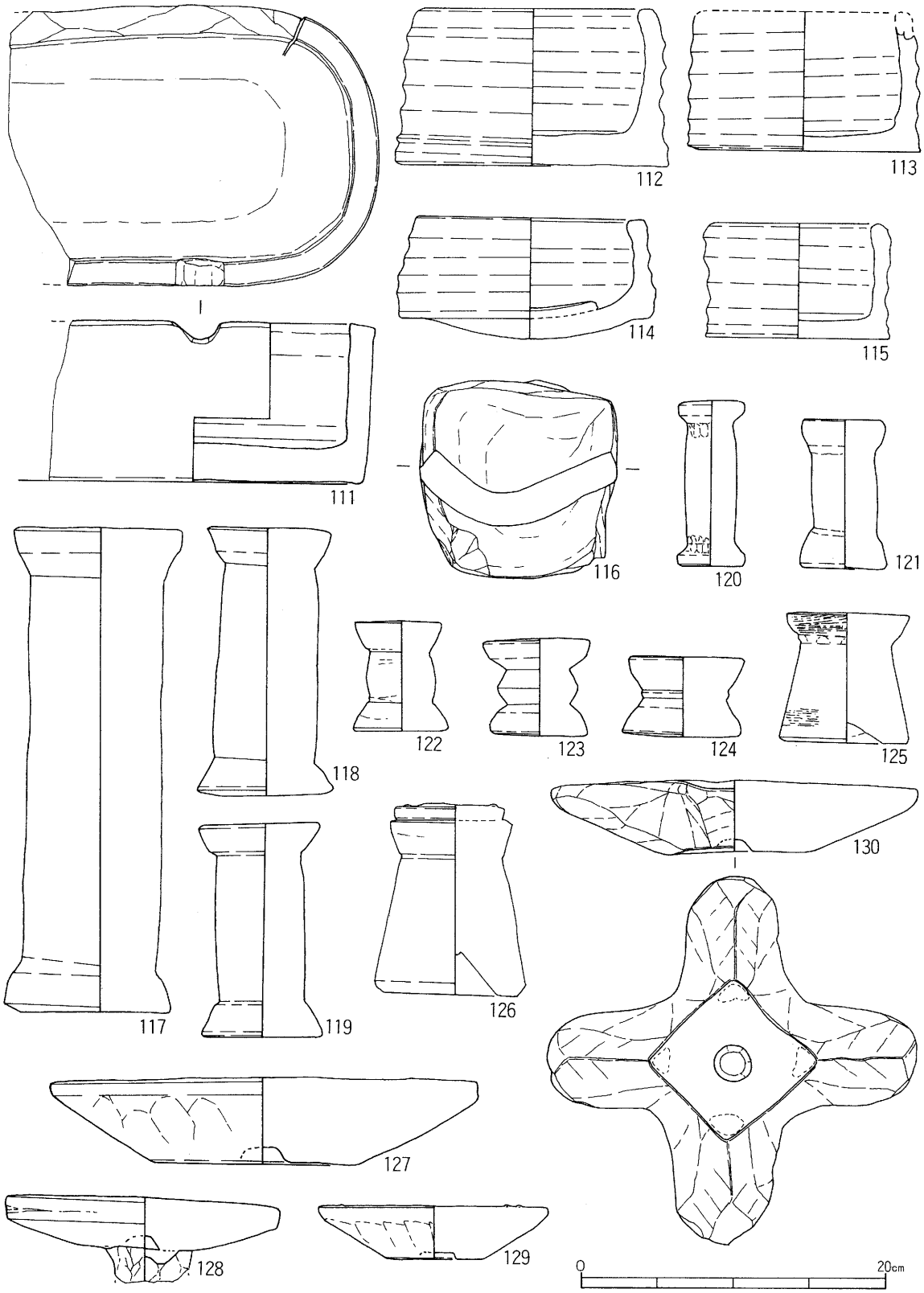
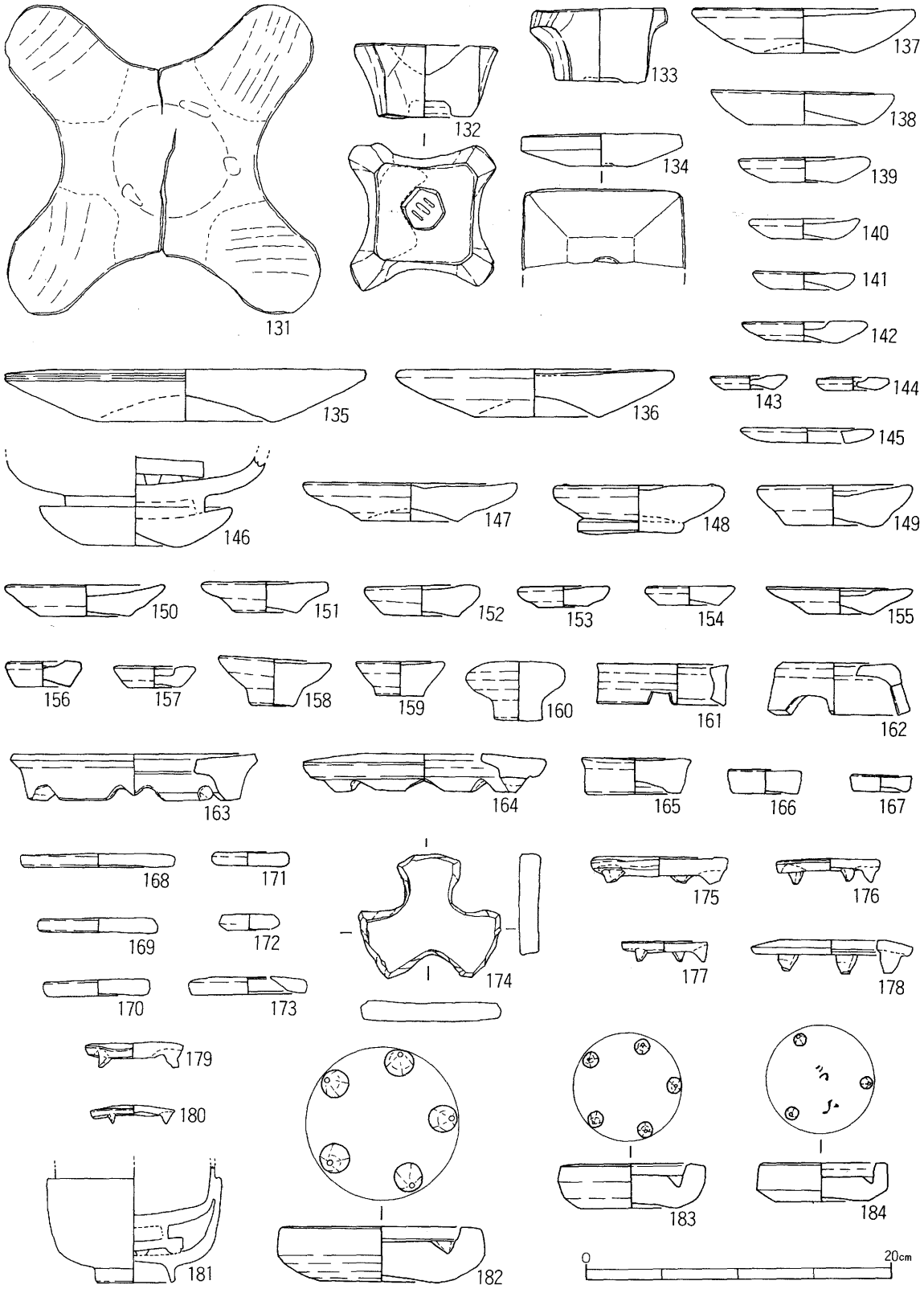

1
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
0
20cm

図９ 遺物実測図５

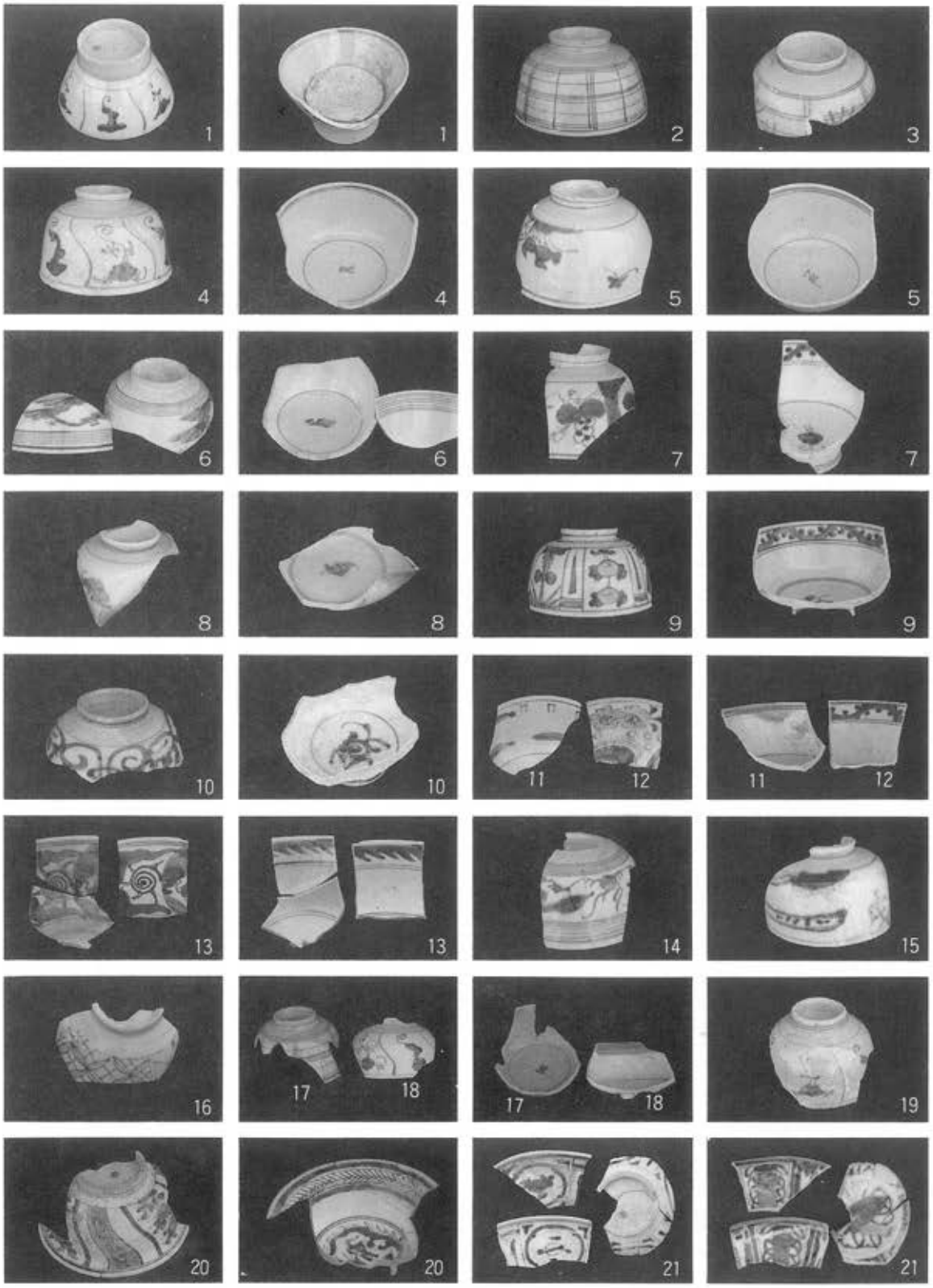

131
132
133
134
137
138
139
140
141
142
135
136
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
171
169
172
170
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
0
20cm

図版１　遺構写真

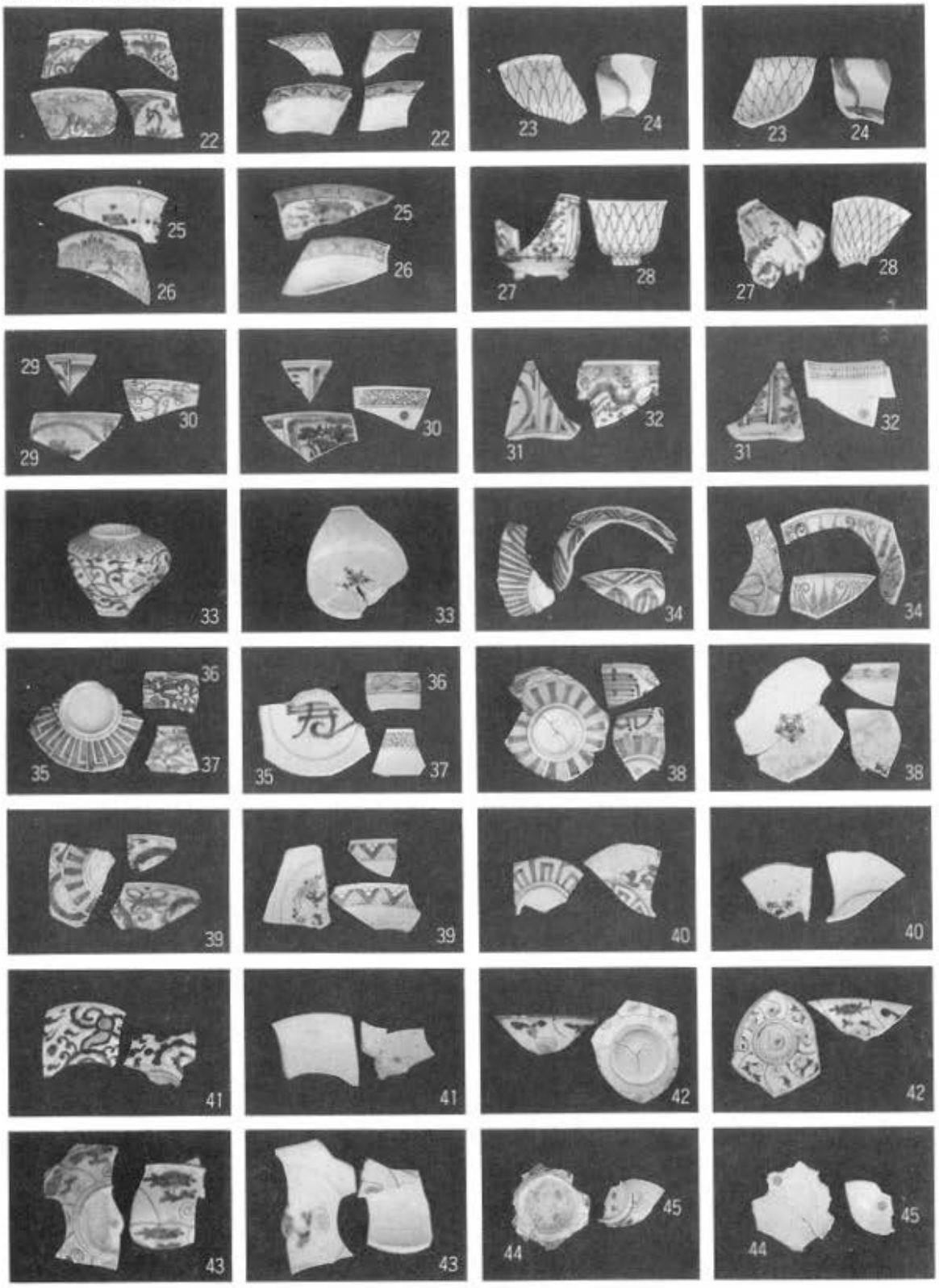
調査区遠景(南から)

調査区全景(北から)

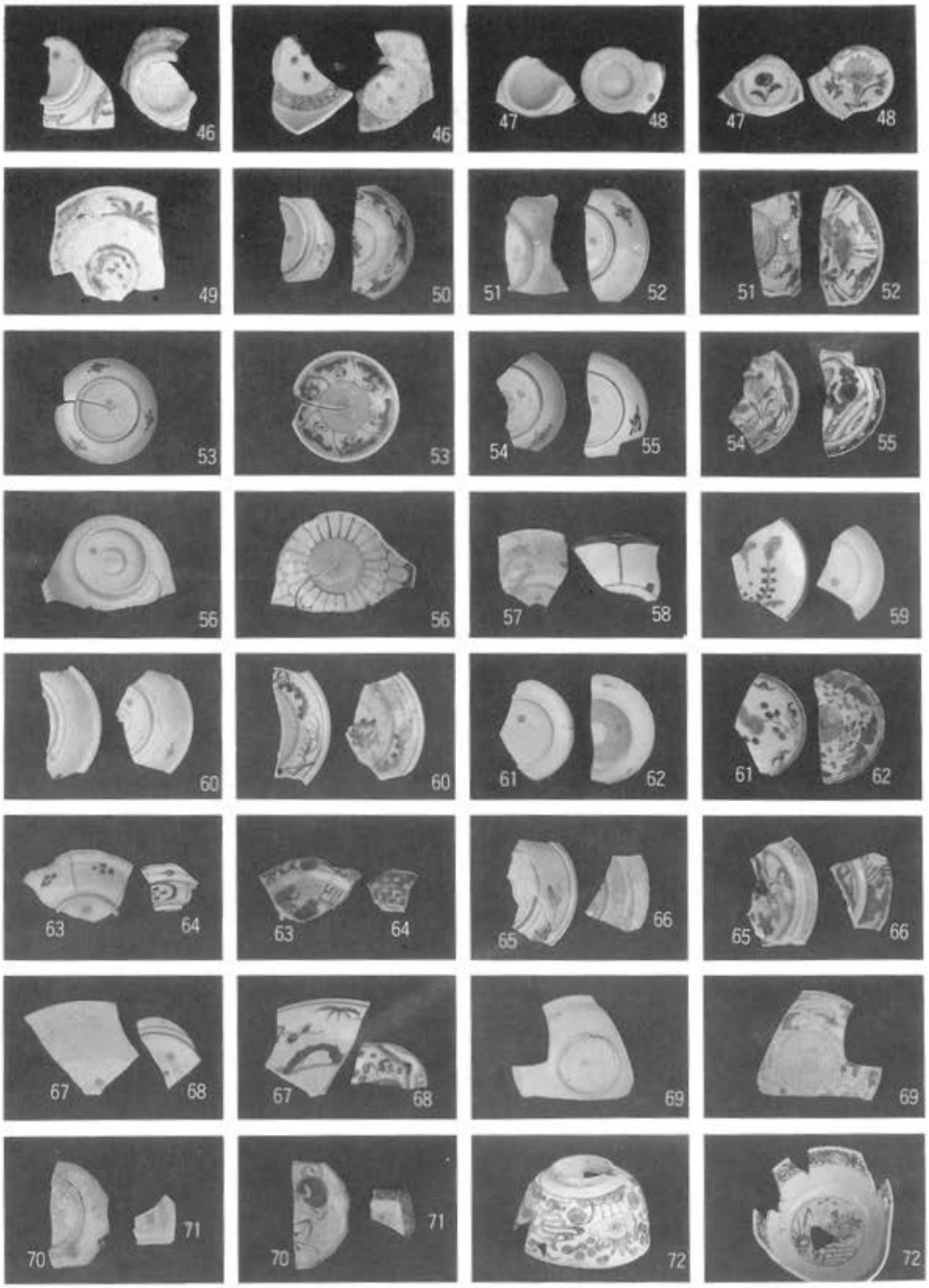
図版２ 遺物写真１


1
1
2
3
4
4
5
5
6
6
7
7
8
8
9
9
10
10
11
12
11
12
13
13
14
15
16
17
18
17
18
19
20
20
21
21

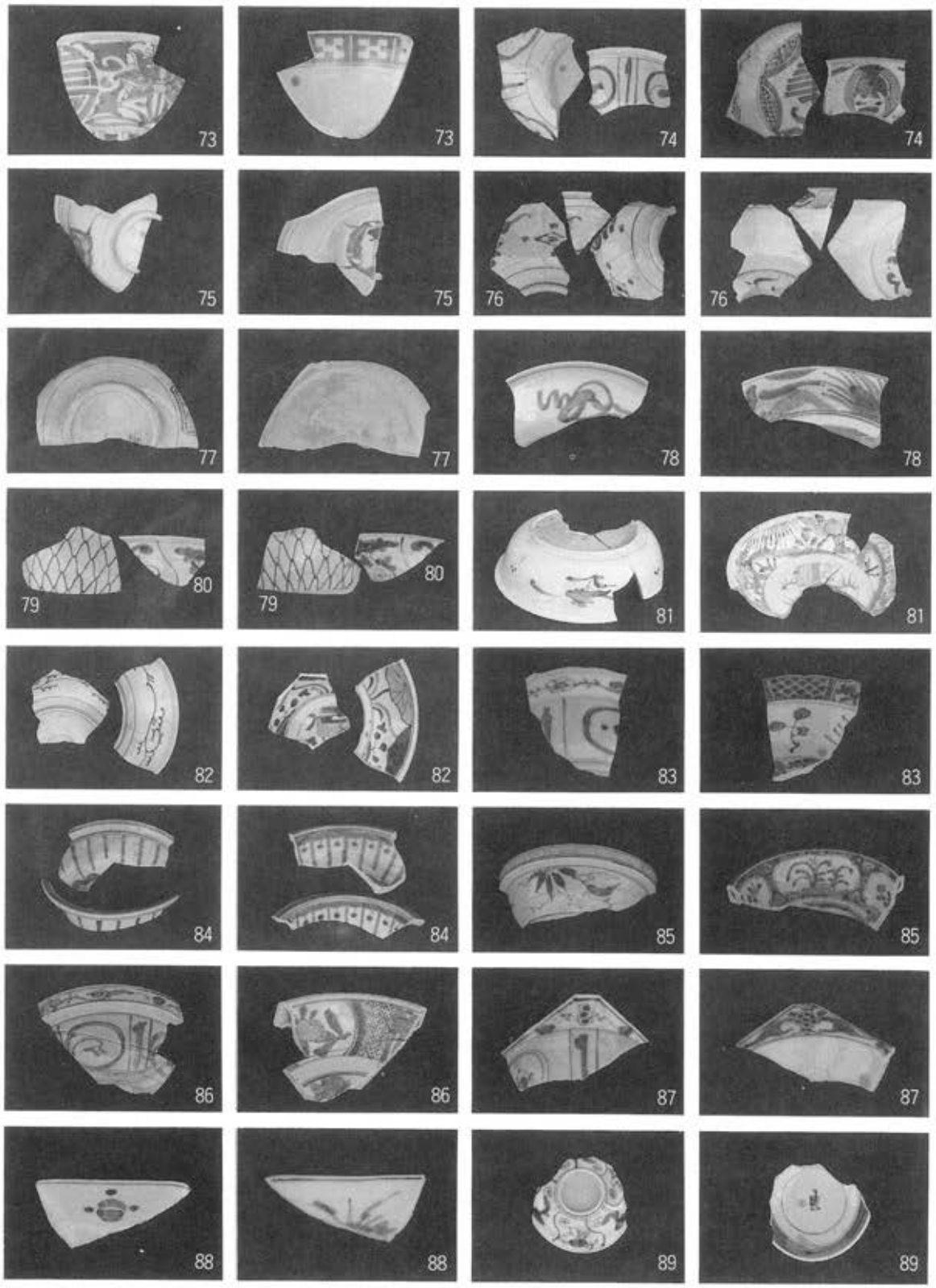
図版３ 遺物写真２


22
22
23
24
23
24
25
26
25
26
27
28
27
28
29
30
29
30
31
32
31
32
33
33
34
34
35
36
37
35
36
37
38
38
39
39
40
40
41
41
42
42
43
43
44
45
44
45

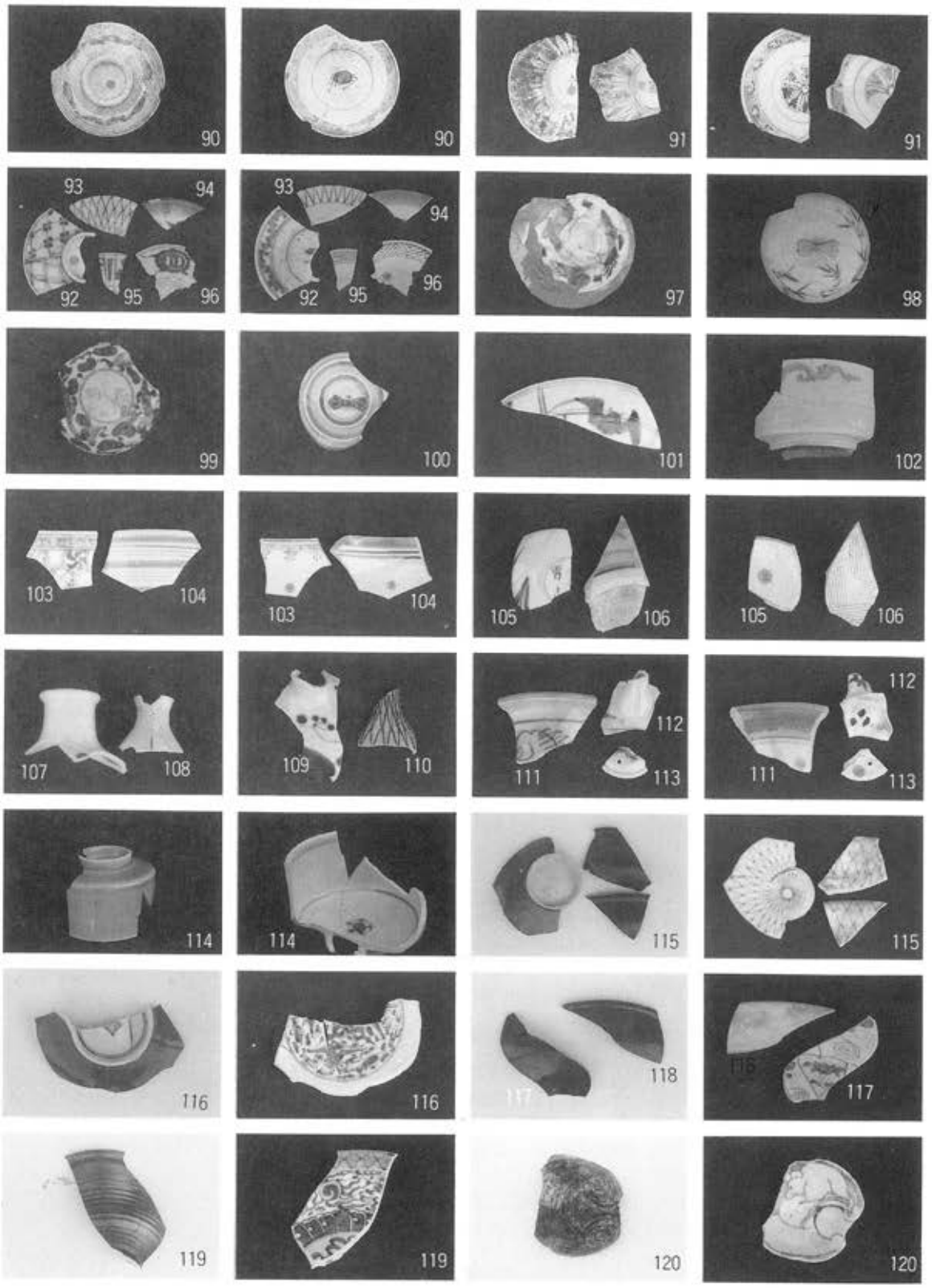
図版４　遺物写真３


46
46
47
48
47
48
49
50
51
52
51
52
53
53
54
55
54
55
56
56
57
58
59
60
60
61
62
61
62
63
64
63
64
65
66
65
66
67
68
67
68
69
69
70
71
70
71
72
72

図版５ 遺物写真４


73
73
74
74
75
75
76
76
77
77
78
78
79
80
79
80
81
81
82
82
83
83
84
84
85
85
86
86
87
87
88
88
89
89

図版６ 遺物写真５


90
90
91
91
93
94
92
95
96
93
94
92
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
103
104
105
106
105
106
107
108
109
110
112
111
113
112
111
113
114
114
115
115
116
116
118
117
116
117
119
119
120
120

南紀男山焼

発行　1992年3月

編集
発行　(財)和歌山県文化財センター

住所　和歌山市広道20番地

TEL 0734-33-3843 FAX 0734-25-4595

印刷　有限会社 土屋総合印刷